

虐待にさらされた「多重困難」の中での 男の子のサバイバル ～「ニヤニヤ笑い」を超えて～

上淵 真理江

1. 問題と目的

「この10年間、ドメスティック・バイオレンス（DV）の加害者にさらされている子どもが受けるドメスティックな影響が取り上げられる機会が一般社会でも専門家の間でも増えている。」（幾島，2006）「児童相談所が通告を受け・・・これは前年度の3万2408件を1千万以上も上回る過去最大の件数であり、その急増ぶりはまさしく顕著というほかない。」（川崎，2011）

このように、DVは増加しており、注目されている。

児童虐待の定義は以下のようなものである。「要約すれば、児童虐待とは、まず保護者が行う行為であること、それは身体的虐待、性的虐待、ネグレクト（養育の怠慢）、心理的虐待の四つの類型に分けられるということだ。」（川崎，2011）

ネグレクトの定義は「子どもの健康・安全への配慮を怠っているなど・・・子どもにとって必要な情緒的欲求に応えていない。食事、衣服、住居などが極端に不適切で、健康状態を損なうほどの無関心・怠惰など。」（川崎，2011）ということである。

ケアの方法としては、まとめると「トラウマから回復するとはどういうことか」という点で、「トラウマを受けた人の多くは、未統合のトラウマ記憶の断片にとりつかれた状態にある。この段階におけるセラピーはこうしたトラウマの記憶を、非言語的なものや解離されたものを含めて、言葉が意味と形を有する二次的な精神的プロセスへと翻訳することを目的としたものになる。そうすることで、トラウマ性の記憶が物語記憶へと変化する。」（西澤，2011）というものになる。また高畠（2008）「子どもにとっては、傷つけられたトラウマ・ボンドを健全なアタッチメント・ボンドに変えることである」と述べている。

著書としては、「DVにさらされている子どもたち」（幾島，2006）、「トラウマの臨床心理学」（西澤，2000）、「トラウマの心理学」（小西，2011）、「児童虐待～現場からの提言」（川崎，2011）、「子どもの虐待～なぜ親が子を？ 傷ついた心をどう癒すか～」（西澤，2011）などがあげられる。

虐待のメカニズムや治療法については様々な研究で触れられている。

幾島（2006）では、DVの加害者とはどういうものか、心理的虐待とはどのようなものか、子どもの回復のための環境づくりの仕方、ネグレクトについて等が述べられている。

西澤（2000）では、子どものトラウマ反応の仕方について、虐待によるトラウマの自己機能への影響、子どもの「感情調整障害」、トラウマを受けた子どものプレイセラピーの特徴などについて述べられている。小西（2011）では、トラウマの定義、最近注目されている児童虐待について、シェルターについて、子どもの心の傷、回復のためのエンパワメントについてなどが触れられている。川崎（2011）ではしつけと虐待の違い、虐待の統計的説明、法律関係などについて述べられている。西澤（2011）では、アタッチメントと虐待の関係、「儀式的プレイ」など回復のためのケアの諸方法などが挙げられている。

さらに「レジリエンス」（心の回復・弾力性）は「強いストレス による影響から回復できる心的特性」と定義されている（二平，2011）。このレジリエンスが本事例でも見られた。

本論文の特徴：

- ① 「多重困難」：本論文ではこの「多重困難」を「家庭内外で複数のストレスが多様にある大変な状態」と定義する。
- ② また後述するように、クライアントのセラピストに対するニヤニヤ笑いが本事例で特徴である。この「ニヤニヤ笑い」は虐待から起因していると思われる。何故なら、「反応性愛着障害」がクライアントにあるとすると、愛する親に虐待されても頼らざるを得ないアンビバレントをクライアントが抱えている可能性があるからである。ニヤニヤ笑いが精いっぱいクライアントのラポールの取り方なのであろう。
- ③ 多職種の連携（児童相談所、看護師、担任、精神科医、ソーシャルワーカー、セラピスト、母親担当セラピスト）の会議を何回か開いた。

そこで、本研究の目的は、「多重困難」（兄の行為障害、母の精神病、父のぼ～とした感じ（アルコール中毒、父親機能の不全）、乳児を抱えているなど）の虐待（親からの虐待（ネグレクト）、兄からの暴力）と「ニヤニヤ笑い」をするクライアントの事例について考察することである。

2. 事例

① 概要

セラピストはTh、クライアントはClまたはA、と表記する。またクライアントの言葉は「 」セラピストの言葉は< >と表記する。

クライアント：Clは小学3年生の男子。

主訴：朝学校に行くのを嫌がりあばれる。学校に行ってしまうばそんな様子はまったくくない。

関わり：2年近い関わりである。

家族構成：父親、母親、兄（高校生、行為障害）、1歳の妹、本人。

セラピーの方針：ラポールづくり、破壊のプレイセラピーの受け止めと、助け（救急車、パトカーのおもちゃの助け。CIの気持ちをThが言語化など）、トラウマへの癒しを行う。

環境整備：兄の施設への入所。本人の施設への入所。公共施設の利用。保健士、担任、ソーシャルワーカー、Th（母親担当ThとTh）、児童相談所の職員との会議での連携である。

就学相談での知能検査でCIと出会った。その時は「怒りと喜びの混じった奇妙な感じの表情」であった。拒否と頬笑みが交互に出てくるような不安定さであった。プレイセラピーではそのような表情は消えていった。IQ=72（環境要因、情緒不安定の要因もあるだろう）である。

② 経過：

ケアの構造：1週間に1回、50分の遊戯療法を行った。同時に母親面接も他のセラピストが行った。

i ニヤニヤ笑いのラポールと「ブラレール事故」のプレイ

X年3月：初回：CIの感情が出ず、「砂漠か砂場」のような印象をThは受けた。情緒的交流や精神の安定感を周囲の人々が心配りしてこなかったと想像した。待合室で母親がいるときは、玩具を倒して破壊的であり、止まらない。

#2（3月16日）：Thを見るとCIはニヤツとする（なぜだろう）。

いろいろな遊びをする。ブラレールで遊ぶ。滑り台から三輪車で降りようとする（危険な遊び方をしやすい）Thは止めると、CIはニヤーとする。（かまってもらえるとニヤーとするのではないか）。玩具は自分から片付けるくえらいねえ、ありがとう>ソファの下のボールをとったりする。（なぜだろう、しつけ？）

父親が来談する。父親の服装が崩れていて、膜がかかったような、ぼ～とした表情をしている。気がかりである。

#5（5月9日）：「今日は学校休んだ」（学校の居心地はどのようなだろう。担任はとてもいい先生である。友達はあるのであろうか。連携不十分、情報不十分である。）<創立記念日？>「・・・」三輪車で遊ぶ。Thの顔を見てニヤーと笑う。（こういう関わりが精いっぱいのCIなのか）トンカチであたりをたたく。Thの顔を時折見てもニヤーと笑う。ブラレールの作品（写真1）を作る。

#6（6月13日）：「学校で遊んでいて、遅れる」とCIの母親から電話がくる。<学校で遊んでいた？>「鬼ごっこしていた」とかすかに笑う。CIの今までの「怒り」をThは感じ

て、<粘土やる？>と聞く。すると、どんどん手で潰し、三輪車で何度も粘土を潰し轢いてニヤーと笑う。

7 (6月23日): <こんにちは>「こんにちは」道路シートの玩具を組み合わせる車を走らせる。きちんと片づける。絵を描く。電車の絵である。かなり上手である。<いい絵が描けたね>色鉛筆のスポンジがとれているのをセロテープで止めてくれる。<ありがとう>Thは、ポジティブフィードバックを特に心がけた回である。Clはかすかに微笑む。ボーリングのピンを楕円形に並べて遊ぶ<面白いこと考えるねえ>

8 (7月14日): プラレールで遊ぶ。Thは声かけを丁寧に心がけた。時々やはりClはThを見る。ガソリンを入れたり洗車したりする。バイクがトラックにひかれたようにする。ニヤーと笑う。笑ってThを見る。Thは救急車とパトカーを走らせる。なんだかバイクが轢かれる。

12 (9月6日): 体の具合が悪いと母親から電話がくる。しかし来談する。<学校楽しい？>「うん！」<お母さんは怖い？>「うん」<お父さんは？>「優しい」養護の先生も来る。箱庭を気に入っているのか、車の山に砂をかける<今度やろうか？>「うん」なかなか帰ろうとしない。ラポールは初期からついていたと思われる。しかしこのラポールはClの不安もあると思われる。Thの様子をうかがったりする。ニヤーと笑うのが印象的である。

14 (10月13日): 父親も来談する。養護の担任も母親と話す。この回は笑顔も見せるし、発語も多い。事故のプレイをし、Thが何度も救急車を出す。「押収」という言葉を何度も使う。<難しい言葉を知っているね>「死者も出た」<かわいそうに>Clはけが人を入院させる。これだけ「事故」のプレイをするのはなぜだろう。トラウマと悲しみ、怒りがあるのだろうか。三輪車を壁になんどもぶつける。

養護の先生からの情報

- * Clを母親は兄扱いにする。妹とClは母親をめぐってライバル関係である。
- * Clは話を母親に聞いてもらいたいようだ。Clが母親を独占する時間を持つことが大事である。
- * 兄の行為障害について母親は毅然とした態度で対するようにとのアドバイスである。
- * 少しずつClは変化している。日記を見てわかる。以前は「母親」という言葉がでてこなかった。母親と大学芋を作ったとか、買い物に一緒に行ったなど書いてある。⇒母親担当者に伝える。

多職種の連携会議を開き、兄の行為障害（Clを殴る、包丁を振り回すなど）の危険性を精神科医が指摘し一刻も早く兄の処遇について考えることになった。

ii 子どもらしい笑いのラポールと「事故」の修復

15 (11月10日): ブロックを天井に届く位に積み上げる。<Aクン頭いい>

チューリップも作って飾る(写真2)。<すごいねえ>創造的である。明るい。写真を撮りCIは持ってかえることになる。「夜だ。星みたいに光っている!」と見ながら言う。<今日学校どうだった?>「学芸会」<何か役をやったの?>「うん」にこ〜と子どもらしく笑う。会話も続く。(母親も疎通性いいとのこと(担当者より))である。CIは落ち着いて穏やかである。Thとの心の交流も感じる。しかしよく見ると、CIは目にアザがる。<殴られたの?>「うん」<お兄ちゃん?>「うん」Thは兄とCIを離したいと考える。母親面接からの情報では、母親がCIを何処かに預けたいと考えている。CIを捨てるつもりではなく、生活習慣など、母親がCIをしつけられないようだと担任の先生が言っていたという。

16 (11月24日): 父親がCIを連れてくる。Thが箱庭はいいか尋ねるとのってくる。最初に大仏を左に置き、家、木がある箱庭(写真3)を作るが、壊して写真(写真4)のようなものを作る。時間がきても、ず〜とパーツを乗せ続ける。「今日は〇〇先生(担任)来ないの?」<うん、いい先生だね>以前よりコミュニケーションが柔らかい。

18 (8月25日): ボールプールで退行する。はしゃいで埋もれる。Thはボールをかけてあげる。パトカーを出す。トラックと車が衝突する。パトカーが来るようにCIがする。<救急車>CIが置く。何度も事故シーンを作る。

<痛いよ>CIの気持ちを代弁してみる。<救急車来ました>嬉しいときにはにこ〜と笑う。自分でパトカー来るようにしたりニヤニヤ笑いが減る。

27 (12月8日): プラレールで遊ぶ。「東京」<すごい字読めるね>駅とかstop等、置くことが出来る。電車を走らせる<電車好き?>「うん!」<そうだよね!>

<あと10分>と言うと、三輪車で羊のぬいぐるみを何度も轢く。<痛いよ〜>CIは笑う。<傷ついてきたのだね>何度も轢く。壁に三輪車をぶつける。

#28 (12月22日) テントにボールプールのボールをたくさん入れる。<気分いい?>うなずく。<安心?>「うん!」

羊の人形を窓に押し付ける。三輪車を入口のラインのぎりぎりで乗り回す。ガタッと落ちて<怖くない?><びっくりした>Thに心配されたいのだろうと思う。<これなら折れても大丈夫だよ>発砲スチロールを渡す。CIは床に置いて三輪車で何度も壊す。いつもよりかなり興奮している。

<お父さんは遊んでくれる?>首を横に振る<悲しいね>きっぱりと首を横に振る。時間が来る。CIは発砲スチロールを自分で片付ける。気持ちを納めるようだ。

#30: 7月13日: 「このあと〇〇センター(アトリエで遊べる施設)」<えらいね><楽しい?>「うん」サッカーゲームをする。二人とも真剣にやる。CIの勝ちである。プラレー

ルでは事故を起こしても自分で解決をする。Clから「写真とろう」と言う。

#41：1月26日：Thがあいさつすると。Clはニコッと笑う。

#44：2月9日：ボールプールに入り手足をバタバタさせて退行する。Thをじっと見る。Thが頬笑み返すと「子どもらしく」笑う。

#46：2月23日：ブラレールではいろいろつなげる。時々Thの顔を見る。Thは笑顔で返すと子どもらしく嬉しそうに笑う。モグラたたきゲームでは床をガンガンたたく。

#51：4月13日：三輪車でプレイルームをぐるぐる回る。入口の段差の所をわざと走って、がたんと落としThを笑って見る。＜わあ～怖かった！＞嬉しそうに何度かやる。＜先生のほうが怖いよ＞笑う。

「〇〇センター（施設）楽しくない。大した友達いないし」

#52：5月11日：落ち着いた遊戯療法であった。「事故」などを起こさない。ブラレールでベルを鳴らして「発車します！」とリアルに遊ぶ。充実したブラレールが出来上がる。駅、トンネルなどたくさん置く。

iii 落ち着いた時期

母親担当者によると、母親は落ち着いているようだ。

#57：5月25日：母親面接の情報：兄は専門学校に入り、疲れて、Clと衝突がないそうである。担任は兄かClを施設に入れたほうが安全と言う。

プレイセラピー：「こんにちは」「一人で来た」＜すごい！えらいね＞ThはClの頭をなでる。「今日は学校休んだ。熱あるんだ」Thが触ると、熱がある。ブラレールでは陰惨な感じはみられない。

#60：7月13日：父親はアルコール依存症であることが判明した（母親面接情報）。父親は問題と直面していないとのことである。

ブラレールではClから写真を撮りたいと言う。救急車とパトカーを中央に撮影する。

#71：9月28日：＜久しぶり＞ニヤッと笑う。ブラレールをすごくやる気と勢いで作り始める。＜すごいね～！！感じがでてきたねえ＞Clのパワーを感じる。＜立体交差すごいね！！＞（写真5）

#80：11月7日：兄はカウンセリングを受け始めた。祖母のところに住んでいるという（母親面接の情報）。

#91：2月8日：ジーンズとジャケットが新しく清潔である。Thとプレイをしていて、触れ合っている感じを抱く。ブラレールで遊ぶ。脱線や死者がでるが、クレーン車で自分でなおし、「治ったところ撮ろう！」と言う。（写真6）＜すごい！こんなに回復したね！！＞と返した。

#120：6月4日：「今日は新しい自転車できた！」と嬉しそうである。生活が安定したのだろう。

#150：2月9日：担任、ケースワーカー、保健士、精神科医、Th、母親担当者で連携の会議を行った。Clを××養護施設に移そうという案がでた。その方が安心であり、子育ての余裕がない父母の助けになると皆が判断した。

3. 考察

i ケースの流れについての考察

Thの介入の仕方：事故のプレイについてはClの気持ちを「言語化」したり、救急車・パトカーを持ち出したりして援助した。また安定した愛情、心配、気遣いについて心がけた。

Clの状態と変化：当初「ニヤニヤ笑い」が多かった。これはこのようなニヤニヤ笑いでは人とつながらないという虐待の経験からではないだろうか。このニヤニヤ笑いはThにだけ見せる。「ためす」ような、また「餌食が来た」ようにThは初めは感じていた。

またよく「片付ける」のは母親からの防衛や罪悪感、愛されたい気持ちを反映しているのではないか。

母親は精神病でネグレクトを行っていたので、Thは正反対の過保護で、「砂糖菓子」のような甘い関わりを心がけた。

「事故」のプレイや何かを三輪車で轢くなど攻撃的なプレイが多かった。ネグレクトや兄からの暴力への怒りの反映であろう。最後は自分で救急車を呼んだり、明るい創造的な遊びに変ったり、Clの気持ちの安定が見られた。「治ったところ撮ろう」と最後に、カメラで事故の修復場面をカメラで撮ったことは印象深い。服装も当初は汚れていて、親にかまってもらえてないようだった。しかし最後には新しい服と新しい自転車が出てくる。

家庭内も、兄の保護施設への入所や父親のカウンセリングの開始、母親のおそらくは投薬などで安定してきている。兄が包丁を振り回していたときは、緊急の連携会議を開いた。行為障害の兄から殴られてアザを作られたClも保護施設に入所することで安全となった。

また、ラポールの表現も最初の「ニヤニヤ笑い」から子どもらしい「にこ～」とした笑いに変わり、安定した愛着の修復になったと思われる。

箱庭の解釈を以下に行う。写真3では、右側に柵を置き、現実世界で自分を守る防衛が必要であると思われた。左下の切株は心の傷のような印象を持つ。左側はごちゃごちゃしており、心の整理が出来ていないようだ。そしてそのあとの写真4はすさまじいパワーと怒り、衝動を感じる。感情があふれている。箱庭を置いたあとc o o lダウンしていったClを頼

もしく思うくらいである。相当、CIは感情が溜まっていると思われる。

ii 先行研究との位置づけ

「加害者は子どものしつけにおいて厳しさと寛大さの間を行き来することが多く・・・」
(幾島, 2006) CIがきちんと片づけをするのはこのためであったのだろう。

「・・・親の攻撃性を引き出さないようにするために自分の感情を強く抑圧することを学習する。その結果、不快な感情を表出し、それを養育者になだめてもらおうといった体験を持つことができず、感情調整機能の発達が阻害されることになるのである」(幾島, 2006)

プレイで感情を思い切り表出することで「なだめてもらおう」体験が出来たのではないかな。
修正体験である。

「・・・プレイにおけるトラウマの再体験である。」(幾島, 2006) 繰り返す「事故」や破壊性は自分が受けた虐待への怒りであろう。

「赤ちゃんになって、現に自分をケアしてくれる大人からエネルギーを得る」・・・」(幾島, 2006) Thは体調や気分を調整し、精いっぱいCIに愛情を注いだ。

「このように一定の流れを経た後に、「はい、これでおしまい」や「一件落着」といった言葉が子どもから発せられた場合、彼らが自分なりにトラウマのプロセスの完了を宣言したのだと判断していい」(幾島, 2006) 「治ったところ写真に撮ろう」はまさにこの点である。

「・・・けれども子どもは大人よりトラウマに弱いのです。付け加えれば、順調に回復するのも大人より早いと思います。・・・エネルギーもあって治りも早いということです」(小西, 2011) 回復の早さは見事である。

「・・・言葉で話せないのであれば、遊びや絵のなかもそういうものが出てきたときにそのお話をしたり、遊びで対応することで受け止めていけるのだと思います。」(小西, 2011)

このようにプレイセラピーは虐待に有効である。

「このようなエンパワメントの作業は、通常の医学的治療の枠からかなりはみだしたことと思われるかもしれませんが。けれども、極端な自己評価の低さが、重いトラウマを持つひとのさまざまな症状の主要な原因の一つであるとすれば、当然これを扱わない限り、治療はうまく進まないでしょう。」(小西, 2011) 虐待援助においてエンパワメントは大切なことである。

「次に、養育放棄や保護の怠慢、いわゆる「ネグレクト」について考えてみたい。身体的虐待について多いのがこのネグレクトである。」(川崎, 2011) 本事例は親機能が低下しているため、ネグレクトが起き、服装も汚れていたり、遊んでくれなかったりしている。

「・・・「反応性愛着障害」・・・この「反応性」とは虐待やネグレクトなどの不適切な養育、あるいはアタッチメント対象の突然の喪失や、関係の断絶などによってアタッチメント

ア障害が生じることを意味する。」(西澤, 2011) ニヤニヤ笑いは人との付き合いが、不安定なためであろう。

iii 反省点

ThのCIへの質問はクローズドクエスチョンが多く、会話が続かなかった。オープンクエスチョンにするには、CIが脆弱すぎると思ったのである。また、他のケースが多く、母親面接者との連携が少し不十分であったことも反省する。

さらに、どこまで日常の虐待を言語化させるか悩んだ。プレイでは「事故」「轢く」を繰り返し、それに対してフォローしたが、はたして、兄からの暴力や母親のネグレクトについての言語化を促す必要があったか。しかし、最終的にはCIの情緒は安定したので、本事例では、CIに対して援助できたと思われる。

4. 終わりに

ケースの流れを振り返ってみることで、筆者は早くから、CIとのラポールがあったことに気付いた。プレイを行っている際は、筆者がCIに「人間扱い」されず、ニヤニヤ笑いで距離がかなりあると感じていた。CIなりのラポールのつけ方であり、虐待の影響であろう。

最初、正直に考えると、筆者はCIとのプレイセラピーが苦痛であった。なぜなら、筆者とのラポールが「独特」であったからである。しかし改めて振り返ってみると、ThはCIの創造的な遊びには感動した。「子どもの変化」は絶大であると実感した。

5. 引用文献

- 小西聖子 ト라우マの心理学 心の傷と向き合う方法 NHKライブラリー 2010
川崎二三彦 児童虐待―現場からの提言 岩波新書 2011
西澤哲 ト라우マの臨床心理学 金剛出版 2000
西澤哲 子どもの虐待 なぜ親が子を？ 傷ついた心をどう癒すか？ 講談社現代新書 2011
及川裕子 久保恭子 刀根洋子 鈴木祐子 乳幼児を持つ親の子どもの虐待の認識度と被養育体験・親性との関連 園田学園女子大学 第46号 2012
田邊泰美 英国児童虐待防止研究 ―労働党政権における児童福祉／虐待防止政策のソーシャルワークへの影響と変化 園田学園女子大学論文集 第46号 2012



写真1

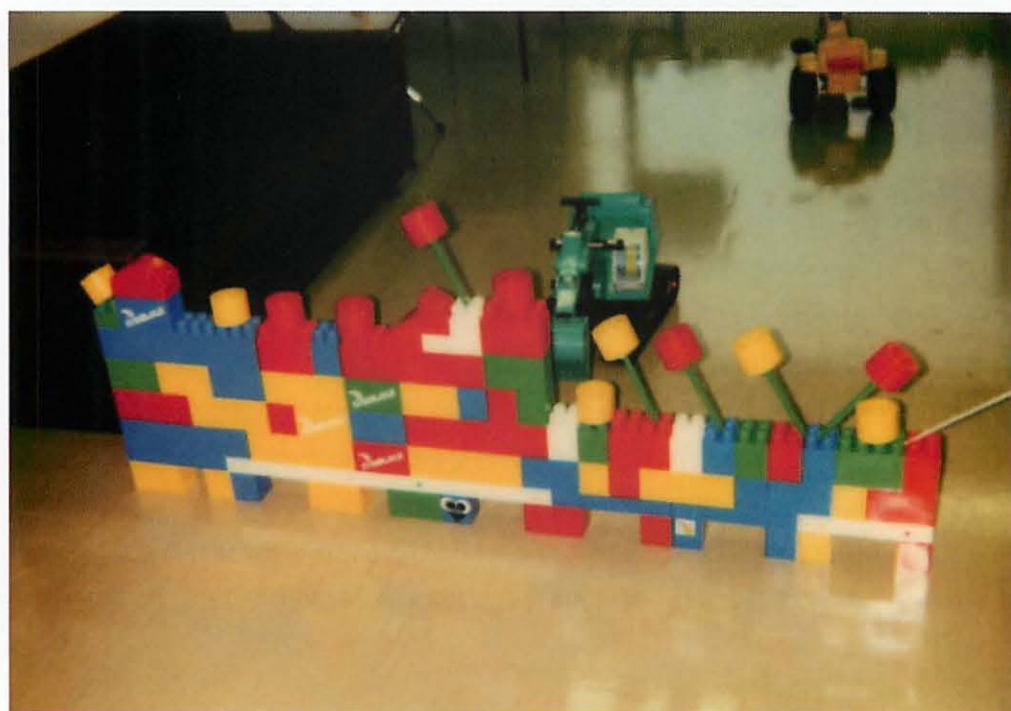


写真2



写真3



写真4

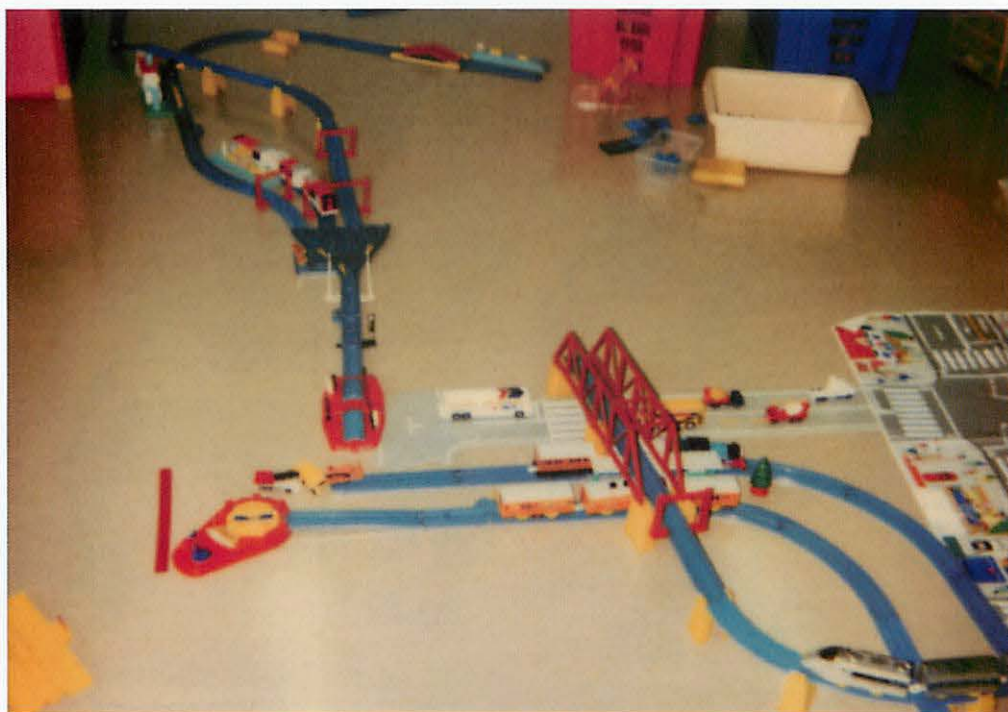


写真5



写真6